

中国訪問記

三 根 久

さる5月22日から6月13日までの23日間、上海鉄道学院の招きにより中華人民共和国を訪問する機会に恵まれました。ことのおこりは昨年(1979年)の5月上海市の学術代表団が姉妹都市である大阪を訪れた際、一行が京都大学を表敬訪問された時、小生が工学部長代理として歓迎会に出席したことに始まる。その時、一面識もない中国の比較的若い学者が私に近づいてきて「三根先生、多値論理およびフェール・セーフ論理について教えを受けたい」といった。彼は論文誌の著者紹介の写真によって私を見つけたということである。彼は、都合がよければ、私の生れ故郷の大連に招待したい。またその折りに多値論理および容錯の理論について上海鉄道学院で講義してほしいという申し入れをした。容錯というのはFault-Tolerantの訳であって、たまたま1980年10月1日～3日に第10回のFault-Tolerant Computingに関する国際シンポジウムが京都で開催され、私が出発委員長であったことによる。このような経緯で、上海鉄道学院電子系の鄭萌講師の尽力によって私の訪中が実現されたのである。

上海鉄道学院というのは中国の国務院の下にある鉄道部(日本でいえば運輸省)の大学であって、中国鉄路運行を直接の目的として、そのための土木、機械、電気通信の科目の教育、研究を行なう大学である。西安をはじめ中国の主要都市に交通大学または鉄道学院が置かれている。

中国の大学制度はなかなか理解するのが小生にとって困難であるが、戦後はソ連の学制を大幅にとり入れたために、各省庁がそれぞれ自身のための大学をつくったようである。たとえば、交通部(運輸省)は公路学院をもっている。非常にまぎらわしいが、汽車というのが自動車を指すのであり、ちなみに、北京市公共汽車公司には大型客車、客貨両用車、旅行車、小客車があり、35個の汽車站があると案内書に書かれているが、これはバス路



北京 三里河にある中国科学院本部

線の運行を意味していて、市内および都市間交通にしろバス運行の役割は大きいようである。交通部は主としてバスおよび船の運行を掌るようである。それ以外に教育部(文部省)があって、その管轄下の大学がある。大多数の大学はこれに属するようである。北京大学、清華大学、浙江大学など戦前から名のある大学は依然として一流大学を誇っている。

一方、中国科学院の直屬の大学として、科学技術大学がある。現在では安徽省の省都合肥にその中心を移しており、四つの現代化の核となるべく拡充が行なわれている。中国科学院所属の科学技術大学は研究所および大学の指導的研究者を養成するのが当面の目的である。科学技術の現代化のため、東北、華北、華南、中南、西南、西北の6大地区にそれぞれ重点大学を定めているが、たとえば哈爾濱工業大学はその1つである。中国はこのように大学制度がわが国のそれと相当に異なっているが、入学試験は教育部によって統一的に行なわれ、全国の大学に割り当てる方法をとっている。

今回は上海には14日間滞在した。宿泊した錦江飯店は戦前に建てられたヨーロッパ風のホテルで15階建の堂々たる建物が2つもあり、外人用の4階建の新館がある。このホテルは朝、スタッフが早い時には6時にモーニング・サービスとしてお茶をもってくる。朝食は7時で、8時には鉄道学院の乗用車が迎えにきて、8時半から11時半まで講義をし、昼食はホテルにもどってとり、午後は1時半から4時半まで講義をするというハード・スケジ

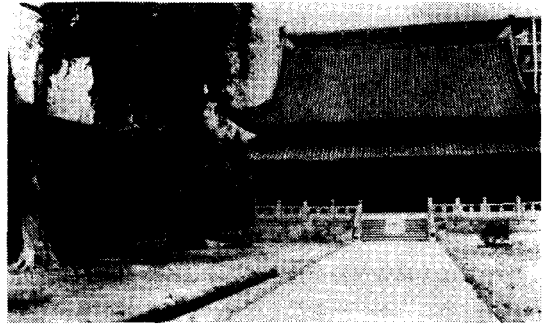
みね ひさし 京都大学 工学部

ュールであった。講義は「多値論理およびオートマトン」を主として行ない「信頼性」および「容錯」の研究の展望も紹介した。これらはすべて事前にテキストを要求され、漢訳されたが、オーバー・ヘッド・プロジェクターのフィルムは日本ですべて漢訳して持参したため、理解しやすかったということで好評であった。午後の講義の代りに「教育に関する雑談会」、「鉄道学院の研究指導」も行った。一度は上海電子学会において、「品質保証と信頼性」の講演会を行った。

上海滞在中は1日だけ上海科学技術大学を訪問した。この大学は上海市立の大学であって、上海市西北郊外の嘉定県南翔の近くにある新しい大学である。外国人招へい学者のためのアパートを建設中であって、できれば夫婦できてくれということであった。現在の中国政府の外貨政策によりホテル代が3倍位に上昇しているの、招へい策としては良策だと思われる。この南翔の近くには孔子廟がある。山東省の曲阜について由緒のあるものだが、1974年の春から展開された批林批孔運動により四人組の一派によって各所の孔子廟は相当の破壊を受けたにもかかわらず、ここは事前に石碑などを埋めたために建物は倉庫として使用されたので無事に残されたということである。四人組による歴史的遺物の破壊はかなりのものであり、各地にその跡が見受けられる。1966年から始まったプロレタリア文化大革命およびその中で急速に権力の座についた四人組は中国の科学技術の進展に大きな障害となっており、大学人にも計りしれない損失を与えていることは、彼らが異口同音に語ることであった。

上海の次には生れ故郷の大連を訪問し、生家を見ることができた。3泊4日であったが夜到着、早朝出発のため実質は2日しかなかったにもかかわらず、ホテルおよび移動用の車の手配を大連工学院に依頼してあったため、結局同学院で「信頼性」および「非線形計画法」の講義を2日にわたってすることになった。同学院の図書館は自慢のものであったようで、洋書の数はきわめて少なかったが、学生用の図書(中国語)は十分に用意されていた。また、学術雑誌は非常に豊富であって、OR関係のものは小生の京大の研究室で購入しているものはすべて揃っているのには驚いた。ただし、少なくとも8カ月の遅れがあるということである。なお、私の書物もコピーがでていたし、すでに中国訳されたものもあった。

北京には6月8日の日曜日に到着したにもかかわらず、中国科学院応用数学研究所の顧基発、呉方、徐光輝、許国志さんなどのOR関係の顔みしりが出迎えてく



上海市西北郊外 嘉定県南翔 孔子廟

れて、再会を喜び合った。また上海鉄道学院からの連絡で姉妹校である北方交通大学からも出迎えがあったが、結局、機動力のある大学のほうのスケジュールにしたがうことになり、同大学で2回の講義と座談会をもつことになった。顧基発さんの教えている清華大学で1回講義を行なったが、科学院のほうは三里河にある本部にゆき、計画局の鄧局長を中心として中国の科学技術の現代化の方策について座談会をもった。中国の技術先進地帯として上海がある。たとえば中国各地のエレベータは上海製だし“上海”という名の乗用車が全国を席卷している。現代化のためにはこれら先進地帯の技術力をますます向上させるべきか、あるいは広大な中国の国土全体にわたって技術が普及するよう努めるべきかということが論争の中心である。先進技術に追いつき追い越すためには、民生を犠牲にして集中化により急進策を採ればよいが、それではインフレーションや公害の発生など各種の歪が出る危険性がある。広大な国土に未開発の資源を多数有し農業上自給自足を可能とするならば漸進主義によって広く底辺の地盤を上昇させることが、中国のこれまでの国策にふさわしいものと考えられる。そのために多数の人材の養成を必要とする。中国では「科学技術」なのか「科学・技術」なのか質問してみたが、明確な答えは得られなかった。日本の近代化は、明治の初めに帝国大学に理工科大学を設置したことからはじまり、時代を経てこれが理学部と工学部に分離した。中国科学院の科学技術大学はまだ理工科大学のレベルにあり、比較的金のかからないサイエンスの分野の進展が行なわれているのは歴史的必然性のようなのである。先進技術は海外から直輸入して、基礎科学を着実に伸ばしてゆくのが自主技術確立の早道であるのは日本の現状を見れば肯定されよう。来年再び中国科学院を訪問するので、中国のORについてはまた別の機会に紹介したい。